



公認会計士だからこそ、 その専門性を活かして、 世界のために いまできることを。



独立行政法人国際協力機構(JICA)民間連携事業部

吉田 進一郎 Shinichiro Yoshida

2003年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。同年中央青山監査法人に入所後、2007年太陽監査法人に移籍。製造業、運送業、ウエディング、外資系等、幅広いクライアントの監査を担当。2010年に独立行政法人国際協力機構(JICA)に入社し、財務部での経理業務、ジェンダー平等・貧困削減推進室にてマイクロファイナンス及び金融包摂のプロジェクトや研修講師として活動のほか、人身取引対策や女性の経済的エンパワーメントのプロジェクトにも従事。駐在員として中華人民共和国事務所にて農業・環境・法整備等のプロジェクトに従事した後、2018年~2019年にはソーシャルビジネスやインパクト投資を学ぶためイギリスのLondon School of Economics and Political Science(LSE)に留学し、修士号を取得。現在はJICA民間連携事業部にて海外投融資(途上国の開発に資する民間企業への出融資)の案件監理や海外投融資全体の管理会計業務に勤しむ。

幅広い活躍のチャンスを探り、公認会計士に。そして、社会に貢献できる仕事を追って、JICA職員に。途上国の発展に貢献し、現地の人たちに寄り添う、吉田進一郎さんに、公認会計士だからこそできる国際協力について伺いました。

公認会計士を目指すきっかけと 監査法人時代

—自己紹介と公認会計士を目指したきっかけをお話いただけますか。

私は2003年に早稲田大学政治経済学部の経済学科を卒業し、その年の10月に公認会計士二次試験に合格しました。学生時代に「手に職をつけて、プロフェッショナルとして仕事をしたい」と考えていて、経済学部にはということもあり、幅広い活躍のチャンスがあるであろう公認会計士を目指した、というのがきっかけです。想像以上に受験勉強が大変で辛かったですが、無事に合格することができました。そして中央青山監査法人に入所し、幅広い業界の監査業務を担当しました。2007年に太陽有限責任監査法人に移籍したのですが、ここ

では1年ほど主査をやり、8カ月ほどの語学留学を挟んでJICAに転職し、今に至ります。

—監査法人時代の仕事内容と、経験して良かったことを教えてくださいませんか？

監査法人時代は、製造業や運送業、ウエディングや外資系など、幅広いクライアントの監査を担当させていただきました。太陽監査法人では主査業務も経験しました。中には非常にリスクの高いクライアントも担当し、当時は本当に大変でしたが、今となってはいい思い出で、貴重な経験をしたと感じています。会計士として監査法人で働いて何より良かったのは、同僚に恵まれたことです。それはもう、会計や監査のプロとして高い専門性を持っている人ばかりで、困難な状況でも動揺せず即断即決できる人であったり、クライアントと厚い信頼関係を築いている人だったり、そういった尊敬できる人が多々いる中で、彼ら・彼女らの背中を見ながら仕事ができたとするのは大変貴重だったとあらためて思います。「会計士としての知見を生かして欲しい」ということで今の仕事に就けたと思っておりますので、監査法人の経験があったからこそ、その後の可能性を広げることができたと感じています。

国際協力へのチャレンジ JICAでの仕事

—国際協力分野に進むきっかけと、現在の仕事内容について教えてください。

自らの持っている専門性を活かして社会に貢献できる仕事をしたいという思いを常に抱いていました。そこで「自分に何ができそうか」ということを考えた時に、国際協力という分野で何かできることがあるのではないかと思います。そんな時にJICAで中途採用を募集していたので、手を挙げ入職しました。

JICAでは、最初は財務部門で経理業務に携わった後、貧困削減やジェンダーイシューに取り組む部署に配属になりました。金融包摂といい、世界に10億人以上いるフォーマルな金融サービスにアクセスできない人々にマイクロファイナンス等を通じて金融サービスへのアクセスを拡大しようという取組があり、これに関連する技術協力プロジェクトや調査、講師を担当しました。また、ジェンダーという観点では、東南アジアにおける人身取引対策や女性の経済的エンパワーメントのプロジェクト

クトに従事しました。その後は中国にて駐在員として、3年ほど環境や農業、法整備の案件等を担当しました。

その後、JICAを退職し、イギリスのロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの修士課程でソーシャルビジネスやインパクト投資を学び2019年に帰国し、今に至っています。今の部署では海外投融資といい、途上国の開発に資する民間企業に出資や融資をするスキームに従事しています。この事業の案件監理や、海外投融資というスキーム全体の収益性やリスクを計測するために、管理会計のとりにまとめを行っています。海外投融資の案件としては、プロジェクトファイナンスとしての再生可能エネルギー事業や金融機関への融資、企業及びファンドに対する出資案件を担当しています。

—現在の業務内容について具体的に詳しく教えてください。

海外投融資という、途上国の貧困削減やインフラ開発、環境や社会の課題解決に貢献する活動を行っている民間企業に出資や融資をするスキームにて、案件組成後の監理をする業務に従事しています。具体的には先ほど触れたことと重複しますが、プロジェクトファイナンスで行っているモンゴルの風力発電事業や、ペルーの日

系社会を起源として設立された組合の金融機関への融資案件、途上国のマイクロファイナンス機関への出資を行っている企業や、アフリカの人々にソーラーランタンを提供する企業、世界の女性の金融アクセスを拡大することを目的に活動しているファンドへのリミテッドパートナーズとしての出資案件等の案件監理を行っています。融資案件ではお金が本当に返ってくるのか、すなわち信用力が落ちていないか、特にプロジェクトファイナンスでは、元利金返済分以上のキャッシュフローを十分に生み出しているのかなどを日常的にモニタリングしています。出資案件ですと、株主として投資先の事業計画の達成状況確認や議決権の行使、ファンド案件では当初計画していたとおり投資案件が作られているのか、IRR(内部収益率)等の財務パフォーマンスが想定どおり表れているのかといったことを確認しています。また、JICAとして開発効果を目指して投融資を行っているものなので、例えばマイクロファイナンス関連案件だと女性への金融アクセスがちゃんと当初狙ったとおりに拡大しているのか、あるいは、マイクロファイナンスの顧客がどのように日常的にお金のマネジメントをしているのかや投資先が提供する金融商品が顧客のニーズに合致して

いるのかを確認するための調査を行うなど、財務面以外の成果も見ています。日常的には、どちらかという財務面を見ることが多いものの、開発機関として開発効果の視点も踏まえながら案件の監理を行っているというものです。

一方で、海外投融資というスキーム全体の管理会計も行っていきます。これは、組織の経営層をはじめとする内部向けに、「海外投融資全体のポートフォリオとしてどのような財務パフォーマンスを出しているのか」を報告しています。どのような前提を置いて会計処理をすることが現在の海外投融資のオペレーションの実態を表しているのかといった検討をしながら管理会計の数値を作り分析しています。

—ありがとうございます。今はコロナの影響でなかなか海外に渡航することが難しいかと思いますが、業務上、実際に海外に渡航することやプロジェクト単位で駐在するようなことはあるのでしょうか。

JICA職員という立場だと、プロジェクト単位で駐在することは基本的にはありません。他方、出張することはあります。例えば案件内容を検討するための調査を行い、案件内容について相手国政府と合意に向けた協議をするといったことです。他にも、案件で何か問題が生じた場合にその現場を確認することや、案件の軌道修正するために相手国政府や現地の最終受益者にインタビューをすること、プロジェクトが予定していた開発効果を出しているか評価をするために現地に出張へ行くことがあります。ただ、現在は基本的にリモートで現地の方とコミュニケーションしており、相手国政府や出融資先の人々とオンライン会議やメールを通じてコミュニケーションすることが多いです。最近では、担当している案件で或る国のセクター全体に関わる問題があり、その国の他のドナー、例えば世界銀行やアジア開発銀行、欧州復興開発銀行などとオンライン会議をして相手国の課題解決のためにはどのような方策を取るのが良いかなどをディスカッションしました。



国際協力の仕事 苦労とやりがい

―業務で大変だったエピソードや、やりがいなどについてお聞かせください。

まず何より、JICAに入った当初は国際協力の経験がなかったので本当に右も左も分からず苦労をしました。監査は基本的に会計基準や監査基準という拠り所になるガイドラインがあり、それらに照らして判断するということになります。一方、国際協力では、必ずしも明確な判断の拠り所がないことが多々あり、かつ予測もしていなかったことにも遭遇します。判断の軸のようなものが私にはまだ分らなかったのが大変でした。

やりがいに関しては、例えばホンジュラスの貧困層の金融アクセスの拡大を通じて生計向上を目指すプロジェクトの案件形成のために、チームと共に現地へ出張に行った時に感じたものが挙げられます。出張という限られた期間中に相手国政府と合意しないといけないため、相手国政府や現地の貧困層の方々、マイクロファイナンス機関等様々な関係機関にもインタビューを行い、夜にその情報をまとめつつ相手国政府との合意文書のドラフトを作成し、これが深夜にまで及ぶような日もありました。非常に苦労しましたが、やはり『相手国の重要な課題解決に貢献できる』というところには、大きなやりがいを感じます。ホンジュラスでは、政府から補助金を受けている低所得層の方に、彼ら・彼女らが毎日、毎週あるいは年間を通じてどのように収入を得て、どのような支出を行っているのか、預金口座があるのか、フォーマルな金融機関からの融資などの金融サービスにアクセスできるのかなどを実際にこの目で見て、聞いて、これに対する解決策をチームや現地政府とも協議し、その上でプロジェクトの内容を考えました。正に対面した人たちの状況を改善するためにプロジェクトを行っているんだという、『誰のために行っている仕事か』を



実感できたからこそ、ハードワークもこなせたと思っています。おそらく国際協力の分野にいる多くの人が同様の思いを抱いたことがあるだろうと思います。

このプロジェクトは数年前に形成したのですが、最近近況を知りました。プロジェクト自体は対象地域が特定のエリアに絞られていたのですが、対象地域でとても良い成果が出て、「この取組は素晴らしい」と、対象地域の外にもプロジェクトのアプローチが広がっているそうです。それを聞いた時はとても嬉しく感じました。

―国際協力に携わる仕事では高い語学力が要求される印象ですが、語学面で何か不自由を感じたこと、また勉強方法について教えてください。

不自由を感じることは今でもあります。8カ月ほど語学留学をし、イギリスの大学院にも行ったものの、やはりネイティブスピーカーには敵いません。英語力は自分自身でもまだまだだと思っていて、今でも不安はあり、英語での電話会議があると、構えてしまいます。電話会議の前では発言内容や、こう発言をしたらこのような返しが来るかもしれないといったことを事前に考えた上で臨むようにしています。母国語

ではないので、その場で臨機応変に反応しなくてはいけない時に反応が遅くなってしまうなど難しい面があります。そのため、今でも英語は毎日勉強しています。記憶の忘却曲線に配慮した暗記アプリを通勤中に使ってポキャブラリーを増やしたり、英語でのプレゼンをまとめたサイトを毎週聴いて、聞き取れなかった部分を録音して、覚えるまで繰り返して聴いたりしています。ネイティブと対等な語学力になることはないだろうと思っていますが、だからといって諦めていい訳ではなく、事前準備の徹底や、勉強する環境は本人の意志次第で作れると思いますので、毎週1%ずつでも上達する努力をすることが大事だと考えています。

―一次に、国際協力分野で働くにあたって大事にしていることなどをお伺いできればと思います。

これはいろいろな意見があると思いますが、私は自戒の念を込めて、想像力が大事だと思っています。特に途上国を相手にする場合には予測不可能なことや避けられないことが起きることもあります。予測不可能なことがないように、仮に起きたとしても慌てず対処できるように、できるだけ

想像の幅を広げ準備をすることが重要です。さらに、相手国政府・投融資先・日本人の専門的知見を持った人材等多くの人々とのスムーズなコーディネーションも重要になります。相手の利害を踏まえ、どのように伝えたら相手は納得するだろうか、トラブルの種になり得るだろうかといったことにも配慮するようにしています。

あとは精神論的にはなりますが、やはり『最終受益者は誰か』という想像力も必要かなと思っています。JICAでの事業の直接的な協力相手は、相手国の政府機関や民間企業となり、さらにコロナ禍で現場に行けない現状では忘れがちになるのですが、事業は現地の人々の課題解決に少しでも貢献することを目指すものです。例えば、私は東南アジアでの人身取引被害者の保護・社会復帰を目指すプロジェクトを担当した際に、タイやミャンマーでの人身取引の被害者を保護しているシェルターを訪問したことがあります。具体的な表現は控えますが、普段私が日常生活を送っている中では目にする事のない厳しい状況に置かれた若い人や子どももいました。また、ホンジュラスでは、現地での仕事で私がプロジェクトの構想を適切に描けず、当時の上司から「お前がチンタラやっている時間が、途上国の困っている人たち、貧困層のどれだけの人に貢献できる機会を奪うんだ」といった叱責を受けたこともありました。その時のことは非常に印象に残っています。普段の業務を行っている最終的な受益者の姿が見えづらくなります。さらに、人々の抱えている課題は複雑で、担当プロジェクトだけで例えば対象地域の人々が貧困から脱却できることは決してありません。それでも、『自分が誰のため、何のために仕事をしているのか』という視点は、忘れないようにしたいです。

—ありがとうございます。なかなか予測不可能な場面が多いかと思いますが、想像力を広げてシナリオを描いたものの、予想していたシナリオと違ったということはよくあるのでしょうか。

たくさんあります。そのような時は、切り

替えて、どのように持ち直すか、その時でできることを考えるしかないと思います。例えば、ミャンマーではクーデターが起きましたし、コロナの影響も然り。インドの医療分野で進めようとしていた案件が、コロナ禍で動きが取れなくなってしまったということもあります。諦めれば良いという意味ではなく、限られた状況下で自分が何をできるのかということ、周囲の人々や他の機関なども相談しつつ、コントロールできる範囲でベストを尽くすということが重要だと思います。

国際協力分野における 公認会計士の価値

—国際協力分野における公認会計士の価値などをあらためてお聞かせください。

分野にもよるものの、やはり会計や財務、監査の知見があるというのは強みになると思います。今携わっている海外投融資は、投融資先の財務諸表を見て信用力を判断したり、投資先と監査法人の関係性について検討したり、あるいは管理会計で実際のオペレーションを反映する収益や費用の計上のあり方を検討したり、経験が活かされているシーンは多いと思っています。

もっと概念的な話をすると、プロジェクトで持続的な開発効果を出すためには、財務面の持続性も確保することが重要になります。例えば、先ほどのホンジュラスのプロジェクトでは5年間にわたり日本から技術協力を行うものでした。5年経って日本からの支援が終わった後もそのプロジェクトの効果を持続させるためには、財務持続性という視点も必要になります。政府からの予算は手当てできるのか、提携した現地の民間企業がプロジェクト終了後も顧客に継続的にサービスを提供できるようなビジネスモデルを確立したのかということが重要となります。途上国の貧困層を対象に金融サービスを提供するマイクロ

ファイナンスも同様で、ビジネスとして行うものである以上、財務的な採算をとれるようにしなければいけない。例えばコスト削減の方法として、支店を設けずにデジタルを駆使して金融サービスを届ける、資金調達コスト等も踏まえ融資の金利を何パーセントにするかを検討するといった視点が必要になります。開発効果なり社会的パフォーマンスと財務的パフォーマンスを両立させるという観点でも、財務の専門性は有用で、会計士としての知見は役に立つと思います。

—次に、吉田さんが考える「国際協力分野に向く人、不向きな人」をお伺いできますか。また、国際協力分野の仕事に従事する上で重要な点をお伺いできればと思います。

軸としては先ほども申し上げたとおり『最終受益者のことに意識を向ける』ということが重要だと思います。あとは、困難なことや不確実なことをある意味楽しめるということも重要なのだと思います。また、知らないことを学ぶ姿勢も大事だと考えています。なぜなら、今まで全く触れていない分野に携わることが頻繁にあるからです。私も、現在携わっている海外投融資において、確かに財務や監査の経験はあるものの、自分自身が投資家側の立場に立ったことが今までありませんでした。出資者あるいは貸し手として相手とどう付き合うのかなど、今まで全く経験がなかったことにも貪欲に、新しいことでもゼロから吸収していくことは大切だと思います。

また、自分自身がすべての分野の専門家になることは不可能なので、コーディネーション能力も大事だと考えています。例えば、私が人身取引対策の専門家かという決断はそうではなく、案件形成時には、その分野の知見のある人の知恵を借りながら、プロジェクトの全体像を考えます。医療のプロジェクトだと、医療分野の方からの知見を活用したり、法令、法整備のプロジェクトだと法律の専門家、環境だと自然環境分野の専門家に協力いただき、専門



家の意見をまとめたりなど、コーディネーション能力も必要だろうと思います。

—今後のキャリアビジョンやこれから携わっていききたいことをお聞かせください。

先ほど触れたマイクロファイナンスや今携わっている海外投融資、イギリスの大学院留学でも学んだソーシャルビジネスやインパクト投資にも共通することとして、財務面での採算を取りつつ、開発効果や社会的パフォーマンスを出すことが、難しいものの、重要だし面白いと思っています。私は公認会計士で、公認会計士としての専門性は財務になるので、これを活かして『社会により良い効果を出していく』ということに、今後も取り組んでいきたいと思っています。

—最後に、公認会計士を目指す学生に向けてメッセージをお願いします。

公認会計士の知見は、監査に限らず多くの分野で活用可能だと思います。監査についても、現在の業務で投資家側の立場に立ってみて、その重要性を非常に強く感じています。投融資先の財務諸表を見る際に、やはり未監査のものは『どこまで信

用したらいいのか』と不安を覚えます。投資家側の立場から意思決定をする上で監査意見の有無は重要な情報だと実感しています。私が監査に携わっていた頃は、監査の重要性を実感として感じられなかった面も正直あるのですが、投資家側に立った仕事をしてみて、監査意見の重要性を再認識させられました。

また、公認会計士の受験勉強はとても大変だと思います。私は学生時代、公認会計士試験の受験に備えて、「大学生としてもっと貴重な経験を積むべきではないのか」と葛藤しながら朝から晩まで電卓をパチパチ叩いて勉強していました。ただ結果としては「やっぱり、根を詰めて勉強して良かったな」と思っています。試験に合格して公認会計士になれたからこそ、いろいろな可能性を切り拓くことができ、チャンスを得ることができました。受験勉強は非常に大変だと思いますが、ぜひ負けずに取り組んで、頑張ってくださいと思います！

このインタビューは2021年8月、リモートで取材をさせていただきまとめました。



〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1
TEL:03-3515-1120(代表)
03-3515-1130(国際渉外グループ)
<https://jicpa.or.jp/>